

野口米次郎の一九二〇年代後期の指向性 —雑誌『國本』への寄稿を中心に—

文化科学研究科・国際日本研究専攻 堀 まどか

はじめに

本論では野口の一九二〇年代後半の指向性を、雑誌『國本』への寄稿を中心に考えてみたい。野口は一九一〇年代には、シカゴの『ニューポエトリ』やロンドンの『エゴイスト』等に寄稿して、国際的にモダニスト詩人たちの中で存在感を示しており、一九二〇年代もモダニズム文学の代表的雑誌として大きな影響力をもったニューヨークの『ダイヤル』をはじめ、様々な新聞雑誌に英文寄稿している。一九二〇年代の日本詩壇でも、詩壇の中核『日本詩人』に敬意をもって扱われ、同時に『日本詩人』と対抗した『詩聖』などの若い詩人勢力からも親密に迎えられて、詩壇の牽引者とまではいえないものの、先端的な大御所詩人としての位置を占めていた。そのような中で、右派政治思想系総合雑誌『國本』への寄稿は、野口にとっては、いわば詩人としての活動をはみだすものであるが、彼の戦時期の活動展開につながる重要な問題を孕んでいる。

雑誌『國本』（國本社）とは、一九二一（大正一〇）年一月に創刊され、一九三六年まで続いたが、特に一九三〇年代になると、日本主義による国家教育的傾向の強い内容となり、「世界に挑戦する」「反共・反ファシズム」などといった主張が強くみられる。

一九二七年から一九二九年にかけて、野口は『國本』に「剣と詩の我建国」（一九二七年一月、二月）、「利久の秘訣」（一九二七年一〇月）、「真日本主義」（一九二八年一月）、「英雄崇拜の真意義」（一九二八年四月）、「曙光時代の感激」（一九二八年八月）、「モダニズム氾濫時代」（一九二九年一〇月）の六本のエッセイを寄稿している。前半は、各6、7頁に及ぶ評論であるが、後半の二つは、ほとんどコラムに近い程度の、見開き二頁の寄稿である。次第に掲載の分量が減り寄稿しなくなったのは、本人の意向か編集者の意向かは不明である。野口の寄稿したエッセイが、この雑誌『國本』傾向に完全に合致したものだだったのか否か、微妙だからである。本節では、この雑誌の中であって、野口の主張していた「詩歌」「国家」「日本の現状と将来性」に対しての言及が、どのような位相にあるのか、考察してみたい。

1 「國本」とは何か

最初に「國本」とは何かということから考えてみたい。言葉上からすれば、「民本主義」に対応しての「國本主義」となるのであるが、実はそう簡単に明晰に区分して捉えられる問題ではない。

「國本」を主張する人々は、特に雑誌『國本』の全体傾向としていえるのは、「民本主義を唱える人々は欧米の真似で良いのか」「モダニズムを謳歌するばかりで、日本の独自性を追求しない現状で良いのか？」という危機意識から議論を進めている。彼等は西洋の新しい思想の無自覚な導入を憂慮し、『日本の国体擁護』を訴えるのである。

しかし、「民本」をいう人々も、日本の制度に合わせた、つまり天皇制を基軸にした政体でよしとしていた。早くは、井上哲次郎が一九一三（大正二）年の段階で、君主立憲政体であっても君子（天皇）が

臣民の福利のために成立しているので〈民本主義〉なのだ、という議論をしている¹。要するに、明確にしておかねばならないのは、「民本主義」は、「国本主義」の対義語ではないということである。「民本主義」は西洋流の「民主主義」とは距離をもって論議されており、また「国本主義」は必ずしも「君主主義」を指さないのである。

「民本主義」は、大正デモクラシー期を代表するものとして想起されるが、当時から「民本主義」は「民主主義（デモクラシー）」とは区別して考えられているのである。吉野作造を中心に「民本主義」が提唱されたが、様々な論者によって非常に多義的な議論が行われていた。吉野作造は、〈民本主義＝デモクラシー〉としたが、それでも「民は之国の本」としており、天皇統治の精神と矛盾させていない。デモクラシーは「国体」に反しないという主張は、吉野作造「民本主義と国体問題」『大学評論』（大正六年一〇月）、柏木義円「君主国体と民主主義」『上毛教育日報』（大正八年一月二〇日）、福田徳三「国本は動かず」『黎明会講演集』（大正八年三月）などの議論に見られる。これは昭和期に入って「国体」の観念が確立され歴史系譜などが論じられる中でも、《立憲君主國たる我が國體そのものが、最も正しい意味に於ける民主主義的國體》²であるとした認識、つまり民主主義や社会主義の根本原理と乖離させないような「国体」論理が示されていくのである。

一九二〇年代後半の雑誌『國本』内でも、「国本」の定義は繰り返されている。今井時郎（帝国大学助教授）は、「國本とは・・・」³の中で家族国家論を説いている。つまり、皇室は一軒しかない本家であり、故に苗字がなく（そもそも本家なので必要がなく）、国民とはその無数の分家であり、故に苗字がある。この本家（皇室）を中心とした分家（国民）は、《眞に自然な血縁的愛着關係に根ざす》のであり、この構造を「国本」と定義している。この「国本」によって、理想的な社会組織（横の關係）が生まれ、また歴史的な継続性（縦の關係）も出てきて、《萬世一系、天壤無窮の事理》が発生すると今井は論述する。要するに穂積八束や寛克彦ら帝国大学法学部教授陣の思想系譜にある議論である。

また、河野省三（国学院大学教授）は、「國本と神道」⁴の中で、日本人にとっての最大の急務が国家に対する信念を深くし固くすることであるといい、国本培養の力たらしめるのが「神道」であり、国本培養のための肥料と支柱が、健全なる国民精神である、と論じている。では、河野の議論にいう「神道」と「国本」とは何であろうか。少し引用しておきたい。

神道とは、國民が同心一體となつて、天皇によつて統一せられ、明浄正直の生活を営みつゝ、日本民族永遠の生命を展開し行くところの傳統的信念である。と云ふことが出来る。億兆一身となつて忠實奉公の力を效し赤子の如くに我が天皇陛下に治しめされる。そこに我が國體の基礎が在る。明く浄く正しく直き心を以て勤勞し修養して、民族の發展の中に、現實の生活の中に永遠の生命を見出さうとする。そこに日本人の眞面目が存する。此の國體の基礎と日本人の眞面目とが即ち我が神道の力の表現なのである。而して此の力に目醒めることが、正しく國本に永久に培う途なのである。（・・・中略・・・）神道は日本民族の傳統的信念であつて、一面から見れば、日本人の道德的信念と宗教的信仰とを融合統一した國民的情操である、我が日本の尊嚴なる國本は此の情操の覺醒と發現とによつて無疆に培はれて行くのである。⁵（下線、堀）

煙に巻くような論理であるが、精神論を神国イデオロギーに近づけてゆく過渡期の主張といつてよいだろう。

野口が寄稿した一九二〇年代の終わり、つまり大正から昭和にかけての時期は、このように「国体」の観念が発達しつつある時代であると考えて良い⁶。「国体」に関する論考や著作は、明治七年頃から始まっていたが⁷、特に一九二〇年代の前後、大正八年頃から昭和一〇年頃まで盛んである。（「国体」とは、

国が持っている「その国に固有の性格」を表すものである。)日本が神国であり、天皇を中心とする一つの家族であるといった「国体」観念を強く打ち出しているのが、この頃の雑誌『国本』の傾向であり、その観念の教育的普及を目的としていたといえよう。一九二七年の『国本』には、笈克彦(帝国大学法学部教授)⁸が「信仰は教育の中心なり⁹」を書き、「信じる心」が教養の基礎で、「敬神尊皇」が教育の根本と説いている。

2 野口米次郎の「自然礼讃」の主張

では、このような状況下、野口は如何なる文章を寄稿しているのか。まず、「剣と詩の我建国」(一九二七年二月)から見ていきたい。

「剣と詩の我建国」は、《私は第一に富士山と萬世一系の國體に感謝せねばならぬ。》の一文から始まる。富士山を《日本の自然の守護塔》とし、《雲と光の金字塔で時を超越して永劫そのものに挑戦する無比の城郭》であるとする。《私共は仰いで千古不滅の富士山を眺め、頭を垂れて永遠の國體が私共に與へる平和と慈愛とを感謝せねばならない》と書かれる。¹⁰

しかし、「萬世一系の国体」という言葉を持ち出した直後に、《私は日本國の年齢が果して幾歳であるかを知らない。又如何なる研究者でも確かにそれに答へることは出来ないであらう。》と述べてもいる。国体観念を徹底させようとする側からすれば、〈日本國の年齢〉の不明確をいうのはおかしい。神武天皇の即位を紀元とする日本の紀年法で〈年齢〉は特定されていたからである。実は、野口の「国体」を賛美する認識は、国体観念や国家神道とは別に、富士山あるいは自然を賛美するということが根本原理となっている。「自然礼讃」と自然礼讃と連動する詩歌の意義こそが、野口の主張の本質である。

私は、「萬葉時代に歸れ」或は「太古の原始性に遡れ」と主張した。私共は眞實の詩歌を古代の生活精神に發見しなければならぬと信じて居る。古代に歸れといふことは私共日本人に必要であるばかりでなく、何處の國の文學でも古代人民の文化とジニアスが近代の時代精神を如何に強壯にし爽快にし、如何に激励興奮させ、如何に活気づけて呉れるかを知つて、その點から詩歌の眞生命に養はねばならぬ。¹¹

野口は《詩歌の眞生命》として古事記を捉え、その国際的な普遍性を主張し、世界的に価値ある文学と位置づけている。古事記は、言うまでもなく日本最古の史籍、神道の經典とされており、国家と連動した意味を担わされていくものだが¹²、野口の古事記評価は、国家神道への信頼へとは繋がっていない。

野口は、日本の宗教と自然の関係、そして文学の役割は次のように、明快に書いている。

私共の祖先は決して人間を靈魂を文學から救はうとしたものではない。如何に他外國人の詩人が宗教に無關係の態度をとつても、彼等はどこかにそれに捉はれた點がある。私共の祖先は無邪氣に又宿命的に自然美を禮讃した。又それを愛國心に結び付けて禮讃した。然るに他外國人が愛國心を歌ふといふ場合になると、彼等は常に不自然である論理的である。私共日本人の詩歌は長い。この長い詩歌の歴史に宗教的疑惑と闘つた作品がない。中には宗教の影響から生れた作品は多いけれども、それは宗教的疑惑の叫びでなく、肯定的に禮讃に過ぎない。實際に世界に國多しと雖も私共日本人位、宗教に無頓着な國民はあるまい、(・・・中略・・・) 佛教渡来以前に私共の祖先に宗教なるものがあつたとすると、それは自然禮讃である。¹³ (下線、堀)

日本の詩歌は、古事記や万葉集などの古代の詩歌に遡っても、欧米文化圏におけるキリスト教にあたるような宗教性をもっておらず、ただ自然礼讃を主にしてしていると論じているのである。故に自然礼讃を謳う日本の詩歌には普遍的価値がある、特定の宗教枠や文化圏に制限されない普遍性がある、と主張する

のである。これは、この評論に限らず野口の終始一貫した主張であった。

野口は、自然礼讃、つまり自然や霊山の信仰を支える日本人の心性を強調する。つまり、神社や社殿をもつ神道、神道と繋がる天皇制や「国体」思想については、明確に言及していない。自然礼讃を突きつめていけば神道的なものにたどり着くとはいえはしても、まず自然ありきという調子である。自然の普遍性と絶対感の中で感じる、共感と感動、心の根底にある敬虔なる気持ち、それを読者に訴えかけていくのである。

実は、野口は基本的に、天皇を直系とするといった思想や皇国に繋げて考える祖先崇拜には、疑問を呈していた。一九一六年五月一日の The Nation (New York) で、日本の祖先崇拜や家系・系譜、神道について論じたあと、次のように書いている。

The fact that modern civilization is driving away people from the birthplaces of their own ancestors is certainly weakening the conception of ancestor-worship in that it deprives them of opportunities for observing the religious rites towards departed spirits.¹⁴

と述べて、海外滞在経験によって、意識がどのように変わるのかについて論じ、森有礼の例を挙げる。そして、最後には、

If the sense of ancestor-worship as a religious consciousness loses its own power, the next question we must think of is what will be the effect on the so-called Japanese patriotism or devotion to the Imperial House; if the religious devotion should become even a moral consciousness, our world-famous loyalty to the Throne, if we still keep it then, should be understood differently. But it is too early now to discuss this matter as an actual question. What I want to emphasize in this short article is that even the Imperial House would be powerless against our changing conception of ancestor-worship. The spiritual insularity which once has been broken cannot be so easily mended.¹⁵

と結んでいる。天皇を中心とした日本の祖先崇拜や家系・系譜、神道に対する現代人の意識はもはや変化しており簡単には修復できない、皇室の影響力は失われている、と野口は言うのである。非常に客観的、懐疑的な論調であるが、要するに、海外滞在の長かった野口自身には、雑誌『國本』が強調する「皇国日本」やその歴史観に心酔するような態度は無かったのである。

つけ加えておけば、こういった野口の日本国内では発表されないような認識や本心にも近いと思われる発言は、英語で執筆され、英米の新聞雑誌に発表されている。日本の政府の政策方針批判や言論弾圧の状況に対する憂慮なども、日本の国外で発表されているのである。野口自身が書いていることだが、一九一〇年（大逆事件）頃から言論者たちは政府の圧力を感じており¹⁶、故に国内と国外への寄稿文のトーンが変わるのは必然であった。（いうまでもないが、一九三〇年代後半から四〇年代にかけては、国外の新聞雑誌や英文執筆に対する圧力がさらに強く野口に掛かっていくのである。）

さて、このように野口は、天皇を中心とする祖先崇拜理論や神道には現代知識人としての疑問を呈していたが、自然礼讃つまり自然や霊山の信仰を支える日本人の心性を、万人の共感できるものとして強調する。それは自然礼讃が全ての基本であるということを主張し、神道や国体や或いは皇國といった意識を強要するものではない。

自然の中に立って、或いは霊山や富士山を前にして、心を純一にし、透明にして、その中に一体感を見いだすこと、或いは宇宙と一体感になること。それが、神と向かいあうことであり、信仰に近い感性

である。特に具体的な神や宗教やその他の信教がなくても、自然を崇拜しろ、ということを訴えていたのである。

3. 国際的観点からの普遍性と、日本主義への傾倒

注目すべきなのは、この自然崇拜の感情について、野口は決して、日本人にしか解らないとは云わないことである。たとえば、野口の「剣と詩の我建国」をみても他の評論などをみても明らかなのは、日本の独自性や将来的な危機感を語るにしても、国際的な視点・観点からの普遍性の強調である。

たとえば雑誌『國本』には、文学に関するエッセイとして、鳥谷部陽太郎が《真日本主義文藝の提唱》を訴え、《外國思想及び外國形式の抑壓を排除》することを主張する記事がある。¹⁷ 鳥谷部陽太郎は、日本の文芸作品が自然主義文学運動以来ことごとく西洋の模倣であり、現在もプロレタリア文芸、イタリアの未来派、ドイツの表現派、フランスのダダ派の寄せ木細工に過ぎないと述べて、日本文藝独自の内容形式を創作することを絶叫している。

野口は、鳥谷部のような「排除」を声高に主張する論調からは、一線をひいていたようにみえる。野口は、日本文壇が〈右から左に西洋を模倣する〉傾向に陥っているとは見ていなかっただろう。彼自身、大正末から昭和初期の日本のモダニズム流行を、短絡的な西洋からの移項で終わらせまいと尽力していたからである。

野口は一九一〇年代の早くから（そもそも一九〇〇年代の英米詩壇で評価を受けた頃より）、西欧に盲目的追随する現代日本への危機感を募らせており、警告を発していた。同時にそれは、日本主義の必然性を主張するということと同義になっていた。

昭和二年は、まさに左翼系思想が強くなってゆく時代である。大正デモクラシーの流れの中では、雑誌『國本』は右翼系であり少数派にあたる。この当時、特に『國本』に集う人々にとっては、モダニズム謳歌の動きを危惧し、反祖国の潮流に対する危機感が強くあったことが、雑誌内のそこかしこにうかがわれる。

野口は、『國本』（一九二八年一月）に掲載された「真日本主義」には、次のように書いている。

今日の日本の状態に関して嘆息すべきものが多い（・・・中略・・・）政治を見よ、政府から政党何れの方向を眺めても精神的正直を欠いてゐるではないか。かういふ今日の社会状態に恐ろしい墮落を來たすに至つた原因を研究してみると、古い日本の背景を失つた近代教育の罪であるかも知れない。¹⁸（下線、堀）

政府への批判をいいながら、それが同時に、日本回帰の呼び声となり日本主義を主張する声となることが注目される。¹⁹ このような意見が、一九三〇年代後半から一九四〇年代の〈ウルトラナショナリズム〉傾倒への布石となっていくのである。

野口は、《真の詩人は、アナーキストである》と述べており、また詩壇ではアナーキストの岡本潤らからも敬服されていた人物である。ここで重要視しておきたいのは、「アナーキスト」と「ナショナリスト」の間が、現在考えるような乖離をもっておらず、むしろ野口の認識のなかでは非常に近いものであったのではないかということである。

4. メレディスと〈ペガニズム〉

さて最後にもう一点、野口の『國本』寄稿の中で注目しておきたいのは、メレディスに対する言及である。『國本』の中の「剣と詩の我建国」(一九二七年二月)では、『古事記』の価値をメレディスの史詩²⁰や進化哲学と比較して説いている。《世界は精神や身體の虚弱なもの、為に存在しない》、《自分の實力を疑ひ始めたが最後、彼は既に人間生活の優越者としての権利を棄てたものである》、《人生の破滅は奮闘や苦痛から来るものでなく、寧ろ放縱な生活の結果であるという信仰は、古事記の随處に発見される》²¹というように、メレディスの進化社会論的な思想を、日本の特性と文学と対照して論じているのである。野口の主張は一九二〇年代から欧米で台頭してくる優生学の論理による民族論などとは異なるが、メレディスの思想や民族観を意識したもので、文明社会の中で淘汰されないうための強固な信念を確立する必要性を感じていたといえる。このような野口のメレディスへの志向は、彼の日本主義やその後のウルトラナショナリズムへの展開に重要な観点をもっている。

ジョージ・メレディス (George Meredith:1828-1909) は、スウィンバーン (A.C.Swinburne:1837-1909) やダンテ・ガブリエル・ロセッティ (D.G.Rossetti:1828-1882) などのラファエル前派と親しくしていた英国の小説家・詩人であり、要するに象徴主義文学に系譜に繋がる位置にある。そしてメレディスは日本の思想と民族とに強い関心をもっていた人物でもあった²²。メレディスについては、夏目漱石が影響を受けていたこと以外には現在あまり注目されていないが、この当時の日本の知識人からは、ドイツのヘーゲルに対照される英文学の最も難渋かつ重要な思想家として捉えられていた²³。野口はメレディスの価値を主張していた中心核であり、先駆者といってよい。

野口のメレディス論は早くは、「メレディスの詩を論ず」(『洋と洲』大正四年一月一日)、「私の歌をメレディスに与ふ」(『現代詩人選集』大正十年二月十七日)、「メレディスへ行け」(『報知新聞』大正一三年一月五日～二一日)があり、また、娘婿である外山卯三郎が訳出した『喜劇の研究並びに喜劇的精神の使用』(ジョージ・メレディス原著、外山卯三郎訳、原始社、昭和三年一月一〇日)には「序」を記している。この外山卯三郎の訳書は、野口米次郎からの教示を受けて訳出され、メレディスの肖像やシルエットなどの文献が野口から貸与を受けて出版されたものだった。(なお、この著作は、野口米次郎と小山内薫とに献辞されている。)野口による「序」には、次のように書かれている。

私が『メレディスへ行け』と叫んだのは一度や二度ではなかつた。近代の文學者で彼位思想と感情を彫刻的に取り扱つた人はない。私共の思想が徒に平面的に成り、私共の感情が意見なく斷片的に分裂し終る時彼は私共を救つて呉れる一種の劇劑である(・・・中略・・・)。今日正に私共は彼を必要としてゐる²⁴。

これが書かれたのが、まさに一九二八年で、時代思想の「平面化」していく様に警告を發し、これこそが当世日本で必要とされる思想であると繰り返して強調されている点が重要である。野口は、メレディスが英国で「日本の禪僧のようだ」とも捉えられていることを述べて、《私は彼をペガニズムの信者で、あな恐るべく敬すべき文豪であると思つてゐる》と書いている。

ペガニズム、つまり「Paganism:異教奉信」のことである。そして、この野口の〈メレディス=ペガニズム〉認識は、『國本』に寄稿した文章の中にも示されている。野口は「真日本主義」(一九二八年一月)で、

今日の日本としては、デモクラシーを唱道するよりか、ペガニズムを宣伝した方が賢明だと私は信じている。²⁵

と述べていた。つまり、野口は、日本国内の潮流が〈デモクラシー〉一辺倒になるよりは、国際的な潮流であるペガニズムを日本なりに再構築すべきではないか、という提案をしていることになる。

メレディスの〈ペガニズム〉〈異教〉は、キリスト教以外を指す。一九世紀後半から二〇世紀初頭、革新やモダニズムを求めていく知識人や文壇人は、神秘主義やアジアに関心を寄せ、伝統的なキリスト教や既存の社会システムを懐疑し批判し相対化していった。彼等は、オリエントやエキゾティシズムに憧れ、異端主義や神秘主義として仏教や他の宗教に関心をもち、また同時にギリシア・ローマへの回帰、古代回帰を謳った。

野口の微妙さは、この点にかかわる。野口が吸収摂取した英米の思想家たちや、彼が親しくしていたイェーツに代表されるような象徴主義者かつ〈脱植民地主義〉の詩人たち、異端に憧れて新しいものを創出しようとする者たちは、いくなれば欧米の反体制派に属することになるわけだが、彼らが持っているオリエンタリズム (Orientalism) に、日本人が無防備に乗った場合、日本では反体制派ではなくなるという構造である。欧米人が自らのヨーロッパ中心主義 (Occidentalism) に対抗するために、日本やアジア主義を持ち出す場合は反体制の主張となるが、日本人が同じ事を同じスキームで主張すると、そのまま国家体制 (= 国家の説く神道系列、神秘主義体制) に近いものになるのである。つまり、同じ内容でも、日本では、欧米での意味とずれてしまうのである。アジア主義は、イギリスではイギリス帝国主義に対抗する意味をもつが、日本では日本帝国主義に対抗する思想とはならないのである。それぞれが属している文化にとっての意味や価値が変換するのである。

野口の場合、反体制派の英詩人たちに評価されて詩人として出立したのであり、彼等の影響を受けてアジア主義・日本主義になっていったのは自然な経緯であり、またそれを欧米の知識人・友人らからも求められていたのだが、野口のそのスタンスは、日本では反体制派にならず、体制派とは差違をもってはいても、大きな文脈では、そのまま体制派に組み込まれていくという構造をもっているのである。

まとめ

一九二〇年代の野口像は非常に複雑で、曖昧模糊とした言説のようにみえるかもしれない。確かに、時代は大正デモクラシーの全盛期かつ、「国体」思想の発達期、変遷期であったが、その中で野口の主張は微妙な立場を示している。完全に『國本』の傾向に乗り切っていたわけではないが、他の記事との共通項が全くないわけでもない。だが、野口に即して考察みると、それは複雑というよりも、むしろ単純な構造であったといえるだろう。野口はモダニスト詩人として、「日本」独自の在り方を追及し、「自然礼讃」を「眞」「信」の普遍性の根拠から主張する。国際的な観点や普遍的な観点を強調して、日本の在り方と必然性を考えようとしていたのである。

『國本』は、帝国大学の教授陣からも執筆しているが、大正デモクラシーの流れの中では、右翼系であり少数派である。『日本詩人』や『詩聖』など多くの詩雑誌で活躍し、民衆詩派やアヴァンギャルドの詩人たちから高く評価されていた野口が、アナーキストと自らを規定しながらも、昭和初めのこの段階において『國本』に寄稿しているということは、その後の彼の活動の国内での展開を考える上においても注目すべきことである。また野口の祖先崇拜や神道に対する懐疑的な意識や、デモクラシーよりもメレディスのいうようなペガニズムを認識せよといった主張は、野口のその後の言論活動と繋げてみるときに重要な問題を孕んでいる。本論では、『國本』への野口の寄稿に何度もみられるメレディスに焦点をあてたが、野口はいうまでもなく様々な欧米知識人文壇人や思想潮流の紹介と移入に尽力した人物で

あり、メレディス言説はその数ある中のひとつに過ぎない。

野口が日本主義や東洋の精神性や哲学を論説することは、モダニズム先端の潮流下にある欧米知識人たちから歓迎され評価されることだった。西欧の文脈で考えれば、その方向性が時代の潮流でありファッションであったといえる。ところが、日本の文脈で考える場合、日本やアジア主義は、西欧に対抗する日本国家の戦略に重なるものとなり、反体制どころか、むしろ国家体制に近いものになるのである。野口の立場は、本人としてはアナキストであろうとし、反体制であろうとしても、結局、いろいろと言えは言うほど、国家体制の方向性に近い立場に属していかざるを得ないのである。本論では野口の『國本』への寄稿に絞って注目したが、この前後左右については稿を改めたい。

¹ 井上哲次郎『国民思想の矛盾』『東亜之光』（大正二年二月）

² 深作安文『我國體觀念の發達』、東洋図書、昭和六年八月一三日、二〇九頁。（この著作は、昭和六年から九年半ばにかけて一八版の増刷されている。）

³ 今井時郎「國本とは・・・」『國本』、一九二八（昭和三年）六月号、五〇頁。

⁴ 河野省三「國本と神道」『國本』、一九二九年（昭和四年）三月号 二頁。

⁵ 河野省三「國本と神道」『國本』、一九二九年（昭和四年）三月号六-七頁。

⁶ 『国体思想変遷史』（船口萬壽著、国体科学社、一九三〇年四月二〇日）など、国体の歴史変遷を辿って、思想概念の体系化を探る潮流が起こっていた。

⁷ 「国体」に関する著作は、明治七年に、小早川惟克『國體略附政體』、太田秀敬『國體訓蒙』、田中知邦『建國之體略記』、明治八年には、石村貞一『國體大意』、加藤弘之『國體新論』が出ていたが、その後はしばらく沈静し、明治二〇年代から再び穂積八束らの言説が出てきて、特に中盤以降になると活発になってくるといった経緯がある。

⁸ 筧克彦（1872-1961）は『古神道大義』や『神ながらの道』を著した東京帝国大学の法学者。彼が「国体」について論じた『國家の研究』は一九一三年。

⁹ 筧克彦「信仰は教育の中心なり」『國本』一九二八年八月、二-六頁。

¹⁰ 野口米次郎「剣と詩の我建国」『國本』一九二七年二月、七〇頁。

¹¹ 野口米次郎「剣と詩の我建国」『國本』一九二七年二月、七一頁。

¹² この当時において『古事記』といったときには、無論、単純な古典評価ではない。「しきしまのみち」の經典は、『古事記』と『明治天皇御集』であるとされていた。（三井甲之「青年運動指導原理『しきしまのみち』」『國本』昭和三年六月、六三頁。）ちなみに、当時の三井甲之（1883-1953）が提言する「しきしまのみち運動」とは、英米のボーイスカウト（以下、BS）運動を例にした少年活動の推進であった。つまり、英国BSは、神や国王を尊崇することで、米国BSは、神及び神国に対して義務を尽くすことである、しかし、日本では『日本』とか『祖

国』とかいえば、『反動思想』とかいって大新聞流行雑誌は反祖国非日本の亡国思想の宣伝ばかりをしている、これでは良くない、と三井は強烈に憂える。「日本主義」イデオログであった三井が日本を英米と比例させて論じていることは注記に価する。

¹³ 野口米次郎「剣と詩の我建国」『國本』一九二七年二月、七一-七二頁。

¹⁴ Yone Noguchi, 'Future of Japanese Shintoism', The Nation (NY), 1916 May 11.

¹⁵ Yone Noguchi, 'Future of Japanese Shintoism', The Nation (NY), 1916 May 11.

¹⁶ 野口は、国外の雑誌に英文寄稿する中で、大逆事件に対する非難と文壇が抑圧されている状況を書き、日露戦争以後の日本の方向性を批判している。（'The Japanese Government and the New Literature', The Living Age, 1911 July）

¹⁷ 鳥谷部陽太郎「真日本主義文藝の提唱 一國民精神の振興と文藝」『國本』一九二七年（昭和二年）七月号、一〇六-一一〇頁。

¹⁸ 野口米次郎「真日本主義」『國本』一九二八年一月

¹⁹ ちなみに、萩原朔太郎が隨筆『日本への回帰』（一九三八年三月、白水社）を書くのは、この十年後である。

²⁰ 野口が論及するメレディスの詩は、Poems and Lyrics of the Joy of Earth (1883) であろうか。メレディスには、Ballads and Poems of Tragic Life (1887)、A Reading of Earth (1888)、Odes in Contribution to the Song of French History (1898) などがある。

²¹ 野口米次郎「剣と詩の我建国」『國本』一九二七年二月

²² メレディスの思想については、平川正信「ジョージ・メレディスの日本観」（『比較文学』一九八六年、二三-三六頁）、同「ジョージ・メレディスの民族観」（『山形大学紀要』一九九六年、一九三-二二二頁）などがある。

²³ 外山卯三郎の「あとがき」（訳書『喜劇の研究並びに喜劇的精神の使用』一九二八年）には、メレディスがヘーゲルに対照される思想家として有名であるということが書かれ、夏目漱石が「メレディスは一生かゝつて、百度程もよめば全部解るだらう」と小山内薫に述べた、ということなどが書かれている。当時の知識人にとっての難解

書かつ重要書であり、野口はその日本知識人のメレディス受容にある役割を果たしていた。ちなみに、ラフカディオ・ハーンも東京帝国大学でメレディスについて触れた講義をしている。

²⁴ 野口米次郎「序」『喜劇の研究並びに喜劇的精神の使用』一九二八年、一頁。

²⁵ 野口米次郎「眞日本主義」『國本』一九二八年一月